

ヴォアアイランド 第2巻

【第9話】

身長5メートルの裸の女がいた。バストもヒップも豊満だがウェストのくびれた白人女性。捕食獣の餌としてこの島に持ち込まれた彼女は最初は170cmほどであったが、食べ物に含まれていた特殊な成分の影響でみるみる巨大化していった。着ていた囚人服はとうに脱ぎ捨て、裸でジャングルの中を動き回っている。彼女の名前はルーシー。

ルーシーの理性はとうになくなっており、本能のままに生きている。腹がすけば食べ、排泄し、欲情すればオナニーする。彼女はその大きさのみならず、性欲も尋常ではなかった。

この日もルーシーは欲情し、自慰行為にふけていた。が、彼女のオナニーは癖が強かった。ルーシーは1人の少女を捕らえ、その少女の頭部を自分の性器へと突っ込み勢いよく出し入れしていた。少女は全身、ルーシーの性液にまみれながら失神しており、完全に性具として使われていた。

少女の身長は150cmほどで、丸裸にされていた。ルーシーは少女の身体を思いっきり性器の奥へと押し込むと、大きなあえぎ声を出す。少女は頭部のみならず上半身をズッポリ性器にハマられている。

ルーシーは少女の頭部や肩を使って、膣内の複数の部分を順にピンポイントで刺激していった。そのつど快感に突き上げられ、あえぎ声を上げる。

ルーシーは汗だくになりながら何十分もオナニーを続けている。その汗や性液などの体臭は近くにいた捕食獣（イーター）の食欲を誘い呼び寄せることとなる。

透明化したイーターがルーシーに近寄ってきた。体長5メ

ートルのグリーディリザード。トカゲのようなワニのような爬虫類型のイーターである。が、すぐに襲いかかることはなかった。いつも捕食している雌肉たちとは明らかに体格が違う。自慰行為中の油断した獲物ではあるが、ほぼ同じ身長ルーシーに簡単には襲いかかることができなかったのである。

襲えないこともないのだが、ルーシーの自慰行為を至近距離で様子をうかがうグリーディリザード。

それから何度も何度も絶頂に達したルーシー。ようやく彼女のオナニーが終わる。

しばらく心地良い余韻に浸りながらぼ～っとしていたが、やっと少女を自分の性器から抜いた。ヌチャツという音とともに裸の少女は解放された。が、すでに窒息しているのか、意識はない。

その少女の身体にはもう興味をなくしたルーシーは、その場を去っていった。

残された裸の少女は地面にうつ伏せに落ちたまま。グリーディリザードはその獲物の尻肉に勢いよく喰らいつき、この雌肉を尻から丸呑みにしていく。じょじょに喉の奥へと呑みこまれていく性液まみれの身体は強制的に開脚させられ、大顎が噛み直すたびに乳房はプルンプルンと揺れる。尻を突き出した形で呑み込まれていくにつれ開脚した両足が身体と並行に、一本の棒状になって喉の奥へとギュ〜ッと押し込まれていく。そしてすべてを呑み込んだ。

このルーシーのオナニー、そして性液まみれの少女がモンスターに喰われる様子はもちろん撮影されていた。木々に設置されたカメラから、そして上空からもドローンのカメラにて。撮影されたその映像・音声は高値で秘密裏に売られることとなる。撮影は24時間行われており映像や音声は残されるが、リアルタイムで鑑賞する機会もある。

これは VORE 好きな富豪たちが鑑賞するショーである。通称ヴォアアイランドと呼ばれる島にはイーターと呼ばれる

捕食獣たちが放たれており、餌として若い女性たちも放たれる。10代の少女たちも多く含まれるこの獲物たちは、基本的に監獄から買い取った女囚たち。

彼女たちはこの絶海の孤島にてイーターから逃げまわりながら、サバイバルを強要されていた。このサバイバルゲームをとり仕切るE Iという組織は、エンターテインメントショーを運営するとともにどんどん改善も行っていった。その1つに楽しめる要素の拡大がある。

客は基本的にVORE好きが集められているが、他にもレズやレイプなどが好きな顧客もいることが分かったため、彼女たちの需要も叶えることによりバリエーションは増えていった。

獲物となる女囚たちの食べ物として特殊な果実を島内で繁殖させていたのだが、その成分の中で人体を巨大化させるものが見つかる。それに反応する遺伝子を持った人がごくごく稀にいるようで、彼女たちがその果実を食べると身体がみるみる大きくなっていくことが分かってきた。

中でもルーシーは特に巨大化が顕著である。が、同時に理性を奪っていくことも分かっている。ルーシーほど大きくなる者は他に確認されていないが、それでも2メートルほどに大きくなった女囚たちは普通サイズの女囚たちをレイプするようになる。

それはそれで観客からのウケが良く、新たな鑑賞ポイントとなった。が、襲われる側はたまったものではなく、ただでさえ肉食のイーターから逃げ回らなければならないのに、さらにこういった女たちからも逃げなければならなくなった。

彼女たちに襲われた少女たちは裸にされ舐めまわされ、強制的に性器などを擦り付けられる。体格差があるので抵抗もできない。そして好き放題されたあとはそのまま動けないほど消耗した状態で放置されてしまうので、イーターに簡単に捕食されてしまう。

襲う側の巨大化女が汗だくで性液や尿を垂れ流すので、その匂いでイーターを呼び寄せてしまうのだ。それでいて普通サイズの女囚たちよりは運動能力があるので、逃げる力

も上。捕食者を呼び寄せる上、好き放題レイプし、危なくなったらすぐ逃げるので弱者はひとたまりもない。

ある日の深夜、ルーシーは川の小さな中州にて女囚たちのコロニー、つまり居住地を見つけた。そこには10代の少女たちが5人眠っていた。見張りを立てることなくそこにいる全員が同時に眠れるということは、よほど安全な場所のようである。少なくともイーターには襲われないような状況を保っているらしい。

彼女らの体臭ができるだけ居住地につかないように、流れ出さないように気をつけてきたのだろう。が、ルーシーが来たことにより状況は一変する。



【第10話】

ルーシーは眠っている少女の1人に襲いかかる。獲物の服を剥ぎ取り投げ捨てた。少女の体臭の染みついた囚人服は川に落ち流されていく。少女の肉体から出たであろう成分が川の水へと溶けこんでいく。

ルーシーは裸にした少女の顔面を自らの股間に擦り付ける。そして激しく腰を振る。すぐに少女は目を覚ますも状況が理解できず、また顔面を押し付けられているのでうめき声も上げられない。眠っている他の4人の少女たちも気づかないまま寝息を立てている。

必死に抵抗する少女だが、身長5メートルもあるルーシーには対抗できずなすがまま。そのうち動く力も失ってしまい、口も鼻も塞がれていたため呼吸困難により失神。しばらく陰部を擦り付けていたルーシーは次に、眠っている2人目少女を捕らえ、またもや囚人服を剥ぎ取る。そしてやはりそれを投げ捨て、川へと落ちる。流されていく少女の服。

ルーシーは2人目の獲物を自らのアナルへとぶちこむ。そして奥へ奥へと少女の身体を尻穴へと挿し込んでいく。かすかなあえぎ声を発するルーシーだが、残る少女たちは気づかない。ここにきてようやく襲われている少女は目を覚めますが、何が起きているのか分らず発狂する。

上半身をすべてルーシーの尻穴へと突っ込まれた少女は、彼女の直腸の中で暴れ回る。が、抜け出すことはできず、ルーシーにとってそれは快感しか与えなかった。ここで大きなあえぎ声を出す。性器からは性液が垂れ流されていく。

ここにきてようやく眠っていた3人は目を覚ます。ルーシーはすぐにその1人を捕らえ、自らの股間へ挟み動きを封じる。そして両腕で残る2人を抱きしめる。アナルに突っ込んだ獲物は肛門の筋肉を引き締めることで拘束したまま。

尻穴、股間、乳房で少女たちを圧迫し続けるルーシー。間もなく4人の少女たちは失神してしまう。ルーシーは気絶し

た少女たちを放す。股間に挟んだ少女も解放。尻穴からも挿しっぱなしだった少女を引き抜く。

巨大な乳房で圧迫し気絶させた少女の1人を裸にし、自らの性器へと挿し込むルーシー。すでに性液が溢れ出していた性器へスムーズに入っていく。ヌチャヌチャという生々しい音を立てながら性具と化した少女を奥へ奥へと突っ込んでいく。あまりの快感に大きなあえぎ声を上げるルーシー。理性を失った彼女に、もはや遠慮という概念はない。

イーターでさえも簡単には襲ってこなくなったルーシーはやりたい放題だった。誰に遠慮することなく餌を探し排泄しオナニーする。体臭をさらしたり大声を上げるのはイーターを呼び寄せる行為なので、餌という立場でこの島に放り込まれた者がやってはいけない行為なのだが、ルーシーほど大きくなれば状況も変わる。

川に投げ捨てられた少女たちの囚人服から獲物の匂いを嗅

ぎとったイーター、つまり捕食獣たちが水中の中呼び寄せられてきていた。

美味そうな雌肉の存在を感知したそのモンスターの名前はクラークン。巨大なタコのような水棲型のイーターである。

水中から姿を現した3体のクラークンは居住地に入ろうと試みるも、そこで動きを止める。獲物の中の1体がやたらと大きかったからである。もちろんそれはルーシーのこと。他にも5匹の雌肉がいるが、そこにルーシーもいたため近づくのがためらわれたのだ。

クラークンは4メートル以上もある触手を8本持っているものの、顔兼胴体は2メートルしかない。普通サイズの人間の雌に比べたら大きいですが、身長5メートルのルーシーには簡単に襲いかかれない。水中ならまだしも、陸上で襲いかかっては手痛い反撃を受けかねない。

が、ご馳走を前にして飢えたクラークンたちは諦める様子もない。隙をうかがいつつ様子を見ている。

3体のクラーケンが近くに寄ってきたことに気づいていたが、ルーシーは気にもとめなかった。陸の上でこいつらに襲われても負ける気がしないからである。気にせずオナニーを続ける。少女の身体を使って激しくピストン運動させる。少女の頭部と肩で膣内の快感ポイントを順次刺激していく。よほど気持ち良かったのか、そのつと大きな声を上げるルーシー。

数分間その行為を続けていた彼女は、ようやく少女を性器から引き抜いた。性液まみれの少女は、もう生きていのかさえ分からない。もしかしたら窒息しているかも知れない。

そんなこと気にもとめず、他の少女たちの衣服も剥ぎ取り丸裸にすると、その少女たちの陰部や性器や肛門を舐めまわすルーシー。舐めまわしながら、自らの指で股間をまさぐりオナニーを続ける。その様子を飢えたクラーケンたちも様子をうかがい続けている。

ルーシーは汗まみれで性液も垂れ流しであった。美味そうな匂いが強く放たれているが、クラーケンたちは襲いかか

れない。が、ご馳走たちは他にも5匹いるため諦めずに好機を狙っている。

何度も何度も絶頂に達したルーシーは、しばらくしてようやく満足したのか自慰行為を終えると、その場を去っていった。そこには5匹の雌肉たちが裸で落ちていた。ルーシーの性液や唾液や汗にまみれた少女たち。捕食者にとってはご馳走である。

すぐにこの食肉に喰らいつくクラーケンたち。雌肉たちは抵抗することもできず、彼らの餌食となっていく。上半身から下半身から、尻から股間から丸呑みにされていった。